

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 67

第 35 回 学術集会のご案内

第 36 回・第 37 回 学術集会のご案内

寄稿 井上正宏 名誉会員（京都大学）

浜田淳一 功労会員（北海道医療大学）

坂本毅治 評議員（関西医科大学附属生命医学研究所）

募集案内

研究奨励賞/女性研究者がん転移研究 Grant 賞

変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第35回日本がん転移学会学術集会/総会のご案内

- 会 長 : 二口 充 (山形大学医学部 病理学)
- 会 期 : 2026年7月30日(木) ~ 31日(金)
- 会 場 : 山形テルサ (JR山形駅 徒歩5分)
- テーマ : 腫瘍微小環境の制御による難治性がん克服への新戦略

<https://jamr2026.umin.jp/>

【プログラム概要】

<シンポジウム>

- がん根治を目指した免疫療法 (公募)
- がん根治を目指した放射線治療 (指定)
- がんと共生 (指定)
- 転移を制御する創薬研究 (公募)

<ワークショップ (口演) >、ポスターセッション ※公募

- 転移とバイオマーカー
- 転移に対する薬剤・放射線耐性
- 転移とがん免疫
- 生体材料を用いた転移の診断・治療
- 転移の実験モデル
- 転移の分子基盤と細胞特性
- 転移と微小環境
- (臨床演題) 転移を制御する臨床試験/共有すべき治療成功例

第35回 総会事務局

山形大学医学部 病理学講座 (〒990-9585 山形市飯田西 2-2-2)

Tel : 023-628-5238 Fax : 023-628-5240

E-mail : 2026jamr@gmail.com

第36回日本がん転移学会学術集会・総会のご案内

- 会 長 : 三森 功士 (九州大学別府病院 外科)
- 会 期 : 2027年6月3日(木) ~ 4日(金)
- 会 場 : 別府国際コンベンションセンター (JR別府駅 徒歩20分)

第37回日本がん転移学会学術集会・総会のご案内

- 会 長 : 樋田 京子 (北海道大学大学院歯学研究院 血管生物分子病理学教室)
- 会 期 : 2028年6月22日(木) ~ 23日(金)
- 会 場 : 北海道大学学術交流センター (JR札幌駅 徒歩10分)

寄稿：私とがん研究、がん転移学会 付録 BB ドイツ旅行記

名誉会員 井上 正宏（京都大学大学院医学研究科）

昨春に定年退官し、この度名誉会員にご推挙いただきました。がん転移学会には長年にわたり、多くのことを学ばせていただく機会をいただき、ありがとうございました。2001年に米国留学から帰国して、大阪の成人病センター（現 大阪国際がんセンター）で独立研究者として一步を踏み出すことになりました。がん転移学会の生みの親のお一人である明渡均先生は、私が赴任した時には既にご逝去されていたのですが、配属された部門にラボメンバーが残っておられ、間接的に明渡先生とつながったことが、がん転移学会に入会する動機になりました。また、同じ研究所の伊藤和幸先生が明渡先生の流れを引き継いで学会の事務局をされていたので、事務局のお手伝いをするようになりました。その後、評議員、理事、事務局長も務めさせていただきました。私は学会の黒子のような役割と思っていたのですが、第31回がん転移学会大会長にご推挙いただき、コロナ明けの2022年にハイブリッドの学会を京都で主催させていただきました。

私は1987年に大阪大学を卒業したあと、外科医を目指して大阪大学の第一外科に入局しました（当時は卒業と同時に入局していました）。外科研修の後、大阪大学小児外科の大学院生として帰局し、細胞工学センターの旧岸本研で研究する機会をいただきました。メンターは審良静男先生で、STAT3のクローニングなど、研究のダイナミズムに触れることができました。学位取得後、一旦小児外科に戻ったのですが、研究をしたいという思いが強く、1998年からUCSFのDouglas Hanahan先生の元で博士研究員として腫瘍血管新生の研究を行い、研究者としてのキャリアをスタートしました。帰国後、研究テーマは血管新生、低酸素応答、がんオルガノイドと変遷していきました。現在は京都大学の特任教授で、これからは自分の研究というよりは研究者のサポート、特に臨床検体の有効利用のお手伝いできればよいなと考えています。

結局、転移は私の研究の中心テーマにはならなかったのですが、転移はがんの本質ですし、すべてのがんの特性は転移につながると確信しています。研究はそもそも局所に集中しがちですが、小川（それぞれの研究者の研究）が合流して大河（がん転移の克服）になるようなものだと思います。がん転移学会は転移に限らず、広くがん研究を受け入れる「がん特性学会」のような形に変貌していきましたが、個人的にはこれからもその流れをむしろ前面に押し出して、研究の流行だけでなく本質を追うマニアックな姿勢を貫いていっていただきたいと思います。今後の益々のご発展を祈念しています。

付録 BB ドイツ旅行記

ここから先はよもやま話です。定年おやじの戯言なので、お時間が許せばお付き合いください。

先ずピアノ演奏について。小学校低学年の頃に姉のおけいこの「ついで」にピアノを習わされていたことはあるのですが、外で走り回ることが好きな男子には苦痛でしかありませんでした。正直なところ、練習もろくにせず、単なる耳コピで、ちゃんと楽譜も読んでなかったと思います。親からやめても良いと許しが出た時にとっても幸せな気持ちになったのを覚えています。ただ、バッハのピアノ曲が好きで、主にグレン・グールドの演奏を聴いていました。今から10年ほど前にふと思い立って、ピアノレッスンを受け始めました。練習曲はまったく弾かず、ほぼバッハばかり弾いてきて、今ではゴルトベルク変奏曲やパルティータが弾けるようになっていました。今の日本は少子化で、子供だけではピアノ教室は成り立たず、シニアが重要なマーケットになっていて、教え方もシニア向けに発達しています。要は、面倒な中高年に機

嫌よく通ってもらう工夫がされています。先生は生徒の弾きたい曲やペースを否定はしませんし、ほめる、おだてる、を基本に、理屈で説明してくれます。大人にとって単に音符を読むだけなら、科学研究よりも簡単だと思います。何よりも、審査も締め切りもなく、楽しむことだけを指すとピアノの練習は楽しいです。

次はビールについて。サンフランシスコに留学中にアンカービールやマイクロブリュアリーの存在を知りました。今思えば、西海岸でマイクロブリュアリーがブレイクする大波に居合わせました。残念ながら、貧乏ポストクだった当時はビール三昧とかはとても無理でした。帰国後勤め先の成人病センターが森之宮にあり、天満に箕面ビールの直営店 (Beer Belly) ができて、これが帰宅途上にあり、こっそり途中下車して一杯飲んで帰ることを繰り返しているうちにクラフトビールの奥深さにはまっていきました。その後研究所が大手前に移転して、大阪国際がんセンターになっても途中下車は続き、京大に移ってからオーバーランして天満に立ち寄っています。今は箕面ビールだけでなく、あちこちで上質なクラフトビールが飲めます。

というわけ(?)で、昨年、自分の定年退官の記念にバッハとビール (Bach und Bier, BB) をテーマにドイツを旅行しました。バックパック、鉄道移動の一人旅で、ビールを飲みながら、バッハの生まれた町 (アイゼナハ) から亡くなった町 (ライプチヒ) まで足跡を辿りました。訪れたのは主に旧東ドイツでした。都市を少し離れると、車窓からみる景色はどこまで行っても高い山がなく、森、農場、少しの家でした。街ごとに土地のビールがあり、外れはなく、ビール文化の奥深さに触れることができました。あと、街角のパン屋さんで朝食を食べるのも毎日の楽しみでした。季節的に何とか滑り込みでアスパラガスも食べることができました。ライプチヒでは訪れたのがちょうど日曜日だったので、聖トーマス教会で、ミサ (無料、自由参加) に参列しました。バッハが好きな人ならわかると思うのですが、聖トーマス教会で聴いたゲバントハウス管弦楽団と少年合唱団によるマタイ受難曲は圧倒的でした。ドレスデンでは、聖母教会を訪れたのですが、第二次世界大戦の爆撃で破壊され尽くされた教会を、瓦礫から再建する世界最大のジグソーパズルプロジェクトをやり遂げたドイツ人の能力と執念にただ頭が下がりました。いずれまたミュンヘンやケルンでビールを飲むことを目標にして、Duolingo でドイツ語学習を続けています。

寄稿： 転移研究者を育む『soil 因子』

功労会員 浜田 淳一 (北海道医療大学看護福祉学部)

昨年6月下旬に第34回日本がん転移学会会長の山本浩文先生より「功労会員之証」が郵送されてきました。誠に光栄なこととお礼申し上げますとともに、年会費を納めなくても学会員を続けられるお得感を味わっています。この度、事務局より寄稿文の執筆機会を与えていただきました。気ままに書いてくださいとのことでしたので、長年慣れ親しんだ本学会の思い出に浸ってみようと思います。

日本がん転移学会 (当時はがん転移研究会でしたが) との出会いは、留学 (米国テキサス大学 MD アンダーソンがんセンター、Garth L. Nicolson 先生) を終え、古巣の北大医学部癌研究施設の助手として迎えてもらった時でしょうか。教授の武市紀年先生から「がん転移研究会ができたから入会手続きしておいてね。」と言われ、会員番号 585 をいただきました。学術集会へのデビューは翌 1993 年に札幌で開催された第 2 回のがん転移研究会です。この時の会長は、その 2 年前に北大を定年退官された小林博先生でした。小林先生は私の大学院博士課程～学振研究員時代の恩師にあたります。余談ですが、先生は今年、白寿を迎えられますが、齢はものともせず、毎日のように札幌がんセミナーの事務局に通われ、執筆活動に勤しんでおられます。さて、このデビュー戦ですが、生まれて初めてのシンポジストとしての発表でした (抄録集から拝借したプログラムの一部を以下に示します。磯合は磯

合の誤植と思われる)。

II. がん転移阻止剤開発へのアプローチ

座長 広橋 悦雄 (国立がんセンター・病)
東 市郎 (北大・免疫研)

1. はじめに 東 市郎 (北大・免疫研)
2. がん細胞浸潤阻止
磯合 敦 (旭ガラス中研)
3. マトリックス分解酵素阻害
中島 元夫 (東大・応微研)
4. がん細胞接着阻害
済木 育夫 (北大・免疫研)
5. がん細胞遊走阻止
浜田 淳一 (北大・医・癌研)
6. 血管新生阻害
田中 紀子 (第一製薬中研)
7. まとめ
広橋 悦雄 (国立がんセ・研・病理)

基礎、臨床、企業 (特に製薬さん) の研究者が一体となって (本学会の謳い文句ですよ)、なんとしてもがん転移を克服するぞという意気込みが感じられるテーマと演題ではないでしょうか。実際、私以外の演者の先生は、『ガチ』で転移を抑えてみせます!」的な闘志溢れる発表だったと思います。私はというと、この頃すでに 10 年くらい転移の研究をしてきていたのですが、とにかくがんが転移するメカニズムを知りたいという思いだけで実験を進めてきていたわけで、転移の阻止など建前でしか語ったことはありませんでした。案の定、歯切れの悪い発表になってしまい、なにより会場で聞いてくださった方々の期待を裏切ってしまったのだらうなど、思い出すたび変な汗が出てきます。

翌年、大阪で開かれた学術集会 (会長: 大阪成人病センター・明渡均先生) も深く印象に残っています。がん転移学会史上「最も熱かった学術集会ランキング」第一位にあげさせていただいています (あくまで私見です)。参加者、特に若い研究者が気楽に討論できる場を提供したいという会長たつての要望で企画されたグループ・ミーティングの話です。懇親会でしこたま食べて飲んだ後に、2 グループに分かれて、1 時間半ほど討論したのです。私は、「遠隔 (血行性) 転移、播種性転移、リンパ行性転移→その要因は何か?」のグループに参加しました。話題提供者の松浦成昭先生は準備万端、喋る気満々です。加えて参加者は気軽に好きなことを言い合い、会場は一気に沸騰状態に陥りました。終盤になると、「ん、ここは居酒屋?」てな雰囲気、司会の今岡真義先生が收拾をつけるのに、ご苦労されていたのが目に浮かびます。この集会でもう一つ忘れられないことがあります。この集会が、大学院時代から公私にわたってお世話になってきた上司である武市先生の最後の学会活動となったことです。大腸がんを患いその痛みにも耐えながらも、杖を頼りに会場を回られ、興味ある演題では質問もされていました。「はまやん、最後まで諦めるなよ。」と言われていたようで、今でも研究などで行き詰まった時にはその姿を思い出しては自分に喝を入れています。

その後も本学会は、忘れがたい出来事を数多く提供してくれました。全国規模の学会で初めて座長を務めたのが第 2 回です。学会発表で賞をいただいたのも本学会 (第 9 回宮坂昌之会長) が初めてでした。また、第 11 回会長・清木元治先生からシンポジウムの企画を伊藤和幸先生とともに任された時は、一端の転移研究者として認めていただいたようでちょっぴり鼻高々になりました。旭川で開催された第 18 回の集会では、高後裕会長肝いりの「International Young Investigators Meeting with Breakfast」の一つを任されました。朝の 7 時から始まるモーニングセッションでしたが、眠気も吹き飛ばす勢いの活発なディスカッションが行われました。他のグループを受け持たれた矢野聖二先生、

井上正宏先生とは準備段階から何度かご一緒させていただき、タメロで会話できる間柄になりました。

そして2003年から昨年まで評議員（第17回の会期後から3年間は理事、2010年から4年間は奨励賞選考委員）として本学会の運営に携わる機会を与えていただきました。理事在任中は、会長やっつて言われたらどうしようとビクビクしていたら、早々に今野弘之先生が手を挙げてくださり心底ホッとしたのを思い出しました。

このように、本学会では、人生初の出来事をいくつも経験させていただきました。それらは、研究者として生きていく上で必要な自信を植え付け、仲間を増やしてくれ、また反省すべき点を教えてくれました。この文章を書きながら、研究者としてキャリアを積んでいく過程でがん転移学会はなくてはならない存在だったなと改めて感じています。これも歴代会長の先生方が趣向を凝らしたプログラムや懇親会を用意してくれたおかげと感謝しております。最後に、日本がん転移学会が転移研究者を育てる最適な土壌を提供し続けてくれることを願って筆を置きます。

寄稿：がん転移学会の思い出

評議員 坂本 毅治（関西医科大学附属生命医学研究所がん生物学部門）

2026年1月某日、突然がん転移学会事務局よりメールを頂きました。例年新理事の先生にお願いをしているニューズレターへの寄稿が、会則の変更により丁度新理事がいらっしゃらないようで、某先生に売られてしまい何故か私が寄稿をすることになりました。何を書いても良い（そして、長ければ長いほど良い）との指示を受けましたので、日本がん転移学会での思い出話を書かせて頂きます。

私とがん転移学会との出会いは、大学院博士課程1年生の時でした。学部（農学部獣医学専修）の最終学年の頃に、卒業研究でかじった研究活動が楽しかった&不完全燃焼だったこともあり、魔が差して就職活動はせずに大学院博士課程へ進学を決めました。当時、がんを含めて多くの研究分野でシグナル伝達研究が真っ盛りの中、分子名が覚えられずシグナル伝達をほとんど理解出来ていなかった私は、細胞外基質を分解してがんの浸潤を促進する、というシンプルな内容に惹かれて、膜型のマトリックスメタロプロテアーゼ(MMP)の研究をされていた東京大学医科学研究所の清木元治先生の研究室を進学先にしました（外科の病院実習で犬の大腸がん腹膜播種を見て転移に興味を持ったことも清木研を選んだ理由のひとつです）。晴れて大学院生となり清木研に入ってすぐ、清木先生ががん転移学会の会長をされるということで（2002年・第11回）、研究室メンバー総出で学会の運営をお手伝いすることになりました。私は学部生の時に学会参加をする機会がなかったので、初めての学会参加ががん転移学会の運営のお手伝いということになります。当時の私では内容を理解出来なかったからかもしれませんが、初めてのがん転移学会であり研究発表を聞いた記憶はなく、クロークの対応や物の運搬を手伝った記憶があります。初のがん転移学会は、スーツを着た大学の先生や企業の方が集まって難しい話をしているな、という「大人の世界」の印象で、当時D1の私からするととても遠い世界のように感じました。余談ですが、私が清木研に加わった1, 2年前に現・東京科学大学の越川直彦先生がアメリカ留学から帰国され清木研の助教として大活躍されており、当時の越川先生はまだアメリカナイズされた感じが残っていて日本語の会話にカタカナ英語が混ざっていて某芸人さんのようでした。越川先生は研究だけでなく清木研の人気者で色々と武勇伝があるのですが、ここに書くのは憚られますので興味のある方は学会の懇親会の時にでも聞いてください。

さて、話をがん転移学会の思い出に戻させていただきます。私の最初の学会ががん転移学会（の運営補助）だったのですが、当時の清木研は研究成果がある程度まとまって論文投稿出来るくらいじゃないと学会発表してはいけない、という雰囲気、不良学生だった私はなかなか論文になるような研究成果を上げることが出来ず、がん転移学会とは縁遠くなってしまいました。久しぶりにがん転移学会に参加したのは、鹿児島大学・愛甲孝先生が会長を務められた2008年・第17回の学術集会でした。実は、鹿児島への研究室旅行を兼ねて清木研有志で転移学会に参加したのですが、清木先生が直前で学会に参加出来なくなってしまい、清木先生抜きで学会の合間に研究室メンバーで大河ドラマの「篤姫」館を訪れたり、「しろくま」を食べたりした記憶があります。また、2010年・第19回のがん転移学会（会長：金沢大学・佐藤博先生）には、清木研の助教として私が担当をしていた当時大学院生の原さん（現・ミシガン大学）と芳野さん（現・東京医科大学）を連れて参加し、ひがし茶屋街などを観光した記憶があります（ちゃんと学会には参加していますよ！）。

私がこれまで参加したがん転移学会で、個人的に一番インパクトが大きかったのは2014年・第23回のがん転移学会（会長：金沢大学・太田哲生先生）でした。いつものように学会1日目の懇親会の後に清木研のメンバーで飲みに行く予定だったのですが、清木先生が疲れたから今日は行かないとおっしゃられて急に飲み会がなくなったので、ここぞとばかりに「金沢おでん」を食べにネットで調べたおでん屋さんに行きました。そこで一人でおいしくおでんを食べていると、学会に参加されていた某先生方2名と女性の教え子の方1名が同じおでん屋に入ってきて、私がこっそり一人で食べているのが見つかってしまい途中からご一緒させて頂きました。おでんを食べた後、某先生から「お前ら若いんだから、この後2人で飲みにも行けよ」と今だと（当時でも？）ハラスメント事案になりそうな言葉を賜り、何故か私と教え子の方と2人で飲みに行くことになりました。このことがきっかけとなり、その8か月後に伴侶を得たことが私の鉄板の持ちネタです。翌年の2015年・第24回のがん転移学会（会長：大阪府立成人病センター・伊藤和幸先生）で奨励賞を頂きましたが、その時の受賞講演でもがん転移学会での「成果報告」としてこのことを発表させて頂きました。

2018年・第27回のがん転移学会では清木研から独立された越川直彦先生（当時・神奈川県立がんセンター）が会長を務められることになり、裏方として再び学会運営をお手伝いいたしました。当然ですがD1の学生時代に見た景色とは全く異なり、学会運営の大変さ（スポンサー集め含む）を傍目ですが感じる事が出来、本当にこれまで会長を務められてきた先生方やその研究室のスタッフの方々に改めて感謝と尊敬の念を覚えました。この時の学会では、横浜中華街で行った懇親会で、こちらが予想していた以上に懇親会開始直後にシニアの先生方がお食事を召し上がられたため、あっという間に食べ物が無くなって若手の先生方が食べるものがない事態になって、越川先生のご決断で慌てて食べ物を追加したことがとても印象に残っています。

このように、当初は「大人の世界」と遠くに感じられたがん転移学会でしたが、私自身の研究者としてのキャリアが進むにつれて、単に自分の研究を発表するだけではなく、気の合う先生方と年に一度ゆっくりお話し出来る同窓会のような（癌学会など大きな学会では難しいので）、また研究の相談に乗って頂き新たな共同研究のきっかけが生まれたりする温かいコミュニティと感じるようになりました。気づけば私とがん転移学会との関りも四半世紀近くになってしまっていて、年齢だけ「大人の世界」に突入しているのに自身の成長の無さにぞっとしています。私自身の研究もMMPによるがん浸潤から始めたはずが、いつの間にか低酸素応答やがん微小環境の研究にシフトし、転移そのものを対象とした研究からは少しずつ退いてしまいました。2021年に現所属にて研究室を主宰させて頂いたことをきっかけに、また播種・転移に関する研究を再開出来ればと思いきろ細研究室ですが奮闘している最中で、少しずつ研究成果をがん転移学会でご報告させて頂ければと思っています。また、2017年に東京近辺にいる仲の良い若手（当時）の先生方と「乳がん・転移若手研究会」という年1回の勉強会・互助会を立ち上げ、現在はより間口を広げ「転移シグナル若手研究会」に名前を変え学生～若手の先生方を中心に発表して頂く会の運営のお手伝いをしていますが、第35回会・会長の山形大学・二口充先生から「転移シグナル若手研究会」のメンバー宛に、がん転移学会で若手中心のセッションを作るのでよろしくとのお話を頂いております（本原稿執筆時点）。以前からがん転移学会にも、奨励

賞・ポスター賞以外にこれからの転移研究を牽引する若手の活躍を後押しするような企画があるといいなと思っていたので、大変うれしく思っています。これからも、がん転移学会が私のような古株の常連さんだけでなく、学生や若手の先生方にとっても居心地がよく、かつ研究アクティビティの高い会として発展していくことを願って、本稿の終わりとさせていただきます。駄文にお付き合いいただきありがとうございました。

日本がん転移学会研究奨励賞

<http://jamr.umin.ac.jp/research/index.html>

本賞はすぐれた研究業績を発表した本学会会員若干名に対して、選考の上、本学会学術集会において授与する

- ・受賞候補業績の範囲は、原則として本学会において発表された業績として、本学会員により応募されたものとする。
- ・受賞候補業績は、将来の発展が期待される若手研究者(応募年度の4月1日現在43歳以下)によるものとする。
- ・研究奨励賞受賞者数は単年度2名程度を原則とする。
- ・研究奨励賞の賞金(奨励研究費)は1件20万円とする。

日本がん転移学会女性研究者がん転移研究グラント賞

<http://jamr.umin.ac.jp/research/05.html>

本賞はがん転移研究の将来の担い手を目指す女性研究者のキャリアアップを支援することを目的とする。
本賞は日本がん転移学会田中紀子功労会員より寄贈され、賞状ならびに賞金(研究費)をもってこれにあてる。

- ・応募時点で日本がん転移学会会員であり、助成対象期間中も会員であること
- ・助成対象期間中にごがん転移研究に従事する女性研究者であること
- ・女性研究者がん転移研究グラント賞受賞者数は毎年1名程度を原則とする
- ・女性研究者がん転移研究グラント賞の賞金は合計50万円までとする

両賞の募集期間：毎年4月1日～9月30日

募集要項・申請書等については、事務局までメールでお問い合わせください

◆事務局◆ E-mail: jamr2021-office@umin.ac.jp

会則・役員選定規定につきましてはホームページを参照下さい

日本がん転移学会事務局 宛

Fax : 06-6945-0355

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)		会員番号	
氏名		生年月日	
勤務先	勤務先名称(部所属も記入してください)		
	〒		
	Tel	Fax	
	E-mail		
自宅	〒		
	〒		
	Tel	Fax	
	E-mail		
雑誌等送付先を○で囲んでください。			
勤務先 ・ 自宅			
変更年月日	西暦	年 月 日	付で変更します
退会届	西暦	年 月 日	付でもって退会します
その他			

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

=====

[発行・編集]

日本がん転移学会事務局

Tel/Fax 06-6945-0355 (直通)

E-mail : jamr2021-office@umin.ac.jp

〒541-8567

大阪市中央区大手前3丁目1番69号

大阪国際がんセンター・研究所内

=====